

英語における 2 通りの補語

嶋 村 誠

I はじめに

むかし、初級の和文英訳を学んだときのことが思い出される。次のような日本文が与えられ、

(1) 彼女は彼の頭をたたいた。

それを英訳することが求められた。その時の学習内容は、まず、日本語で(1)のように「彼の頭をたたいた」と表現される動作について、英語では、「たたいた」ということを動詞“hit”で言い表そうとすると、少なくとも(2a)と(2b)の2通りの英文が考えられること、

(2) a. She hit his head. (タイプ I A)

b. She hit him on the head. (タイプ I B)

そしてさらに、これらの文の構造について次のような説明が加えられていたように記憶している。すなわち、日本語の(1)においては、「彼の頭」が全体で名詞句という1つの単位を成している（すなわち1つの構成素(constituent)を成しているということを学んでいたことになるが）表現が使われているということ。これに対して、英語の(2a)においては、それと同様に“his

head”という2語が全体で名詞句という1つの単位をなして動詞“hit”の目的語になっているが、英語ではそのような表現方法だけでなく、“his”と“head”が指しているものをそれぞれ別の名詞句として独立させ、(2b)のように、誰をたたいたのかということと、その人のどこをたたいたのかということ、別々の名詞句にして分けて表現することもできること、そして(2b)のように2つに分ける表現方法は、日本語においては、(3)のように「てにをは」をいろいろ変えただけでは言えそうにないので、英語独特の表現のひとつとして習熟するようにとの注意が添えられていたように思う。

- (3) a. * 彼女は彼_iを頭_iでたたいた¹⁾。
 b. * 彼女は彼を頭にたたいた。
 c. * 彼女は彼を頭をたたいた。

英文を書くときに主語の選択のしかたに注意するようということとはしばしば語られるが、それだけでなく、何を目的語とするかということにも注意が必要であることを学んだひとこまでもあった。本稿では、何かと何かがつかるようなときに、それを描写した日本語と英語のそれぞれの表現について、統語的・意味的な観点を中心にどのような特性がみられるのかということ、認知言語学を支える言語観を視野に入れつつ考察してみよう。

II 2通りの補語（その1）

前節の(1)において「彼の頭を」は全体で1つの構成素を成しているが、これが必須の項であることは、それを削除した(4)が非文であることから分かる。

1) 下付の“i”は、それが付いている「彼」と「頭」の持ち主とが同一人物であるということを示すために付してあり、その条件が満たされている場合に、(3a)が非文であることを示している。こうした同一指示条件が満たされていない場合、すなわち、「頭」が「彼」とは別人のものの場合には、(3a)は正文となる可能性がある。(3b, c)の場合には、同一指示条件が満たされている場合だけでなく、満たされていない場合にも非文である。

同様に、(2a)と(2b)においてそれぞれ“his head”と“him”が必須の項であることは、それらを削除した(5a, b)が非文であることから分かる。一方、(2b)の“on the head”は、それを削除した(6)が非文とならないことから、随意的な項であることが分かる。

- (4) * 彼女はたたいた。
 (5) a. * She hit.
 b. * She hit on the head.
 (6) She hit him.

これらの要素の呼び名に関連して、日本語にそもそも主語が存在するのか、また主語だけでなく目的語についてもどのように規定するかという問題があるが、本稿の直接の目的とは異なるので、ここでは、伝統的に主語、目的語などと呼ばれている、句の中の主要部にとって必須の項を補語(complement)と呼び、修飾語など随意的な項である付加語(adjunct)と区別することにしたい²⁾。したがって、(1)の「彼の頭を」や、(2a)の“his head”、(2b)の“him”は補語であり、(2b)の“on the head”は付加語ということになる。英語の動詞“hit”は(2a, b)がどちらも正文であるところから、補語の選択のしかたが2通りあることになる。そこで、説明の便宜上、2通りの補語の選択方法のうち、(2a)のほうを「タイプ I A」、(2b)のほうを「タイプ I B」と呼ぶことにする。日本語にはタイプ I だけが存在し、タイプ I Bは存在しないようである。

ところで、認知言語学では、第1に、全体の意味は構成素の意味の総和に還元できないゲシュタルト的性格のものであると考える。すなわち、いわゆる構成性の原理(Principle of Compositionality)は否定される。また、第2に、ラネカーは、文法を記号体系の一環として捉える the symbolic view of grammar と呼ばれる言語観に依拠した認知文法の確立を目指している³⁾。

2) 文法関係の規定については、益岡他(1997: 第3章)を参照。

この文法観の背景には、語彙項目がそれぞれ固有の意味をもっているのと同様に、文法関係、構文、品詞など、文法を構成する単位もそれぞれ固有の意味をもっているはずであるという直観が存在している。言語観の正しさを証明することは容易なことではないが、これら2つの認知言語学の特徴を検証することを視野に入れながら、上記のタイプ I Aとタイプ I Bの表現について、具体的な例に即して、考察してみよう。

まず、タイプ I Aとタイプ I Bの表現は、それぞれ異なる文法的構成単位から成っているが、はたして交換可能な表現であろうか、それとも意味がそれぞれ異なるのであろうか。それぞれどのような場合に使われているか、少し詳しく観察してみよう。

まず、既出の(2a, b)について考えてみよう。大きな違いの1つは、タイプ I Aの(2a)の場合、述語動詞“hit”の必須要素として表現されている“his head”の中心語(head)が“head”という体の一部分を表す表現であり、タイプ I Bの(2b)の場合は、“him”という人全体を指す表現であるということである。必須要素であるということは、自ずとそこに重点が置かれている可能性が高いと考えられるであろう。すなわち、(2a)の場合には、誰をたたいたかということよりもどの部位をたたいたかということが焦点になる場合にふさわしい表現であろうし、(2b)の場合には、誰をたたいたかということに焦点が置かれ、さらに付加的に部位についての言及が加えられているということであろう。例えば、腹立たしく思って人をたたこうとする場合を考えてみると、腹立たしい気持ちの矛先は相手の人物そのものに向けられているのであって、決して相手の部位に対してではない。従ってこのような場合には、相手の人物そのものを補語とするタイプ I Bがふさわしい表現として考えられるのではなかろうか。このような話し手（書き手）の精神作用と表現との関係を、さらにいくつかの実例に当たって検証してみよう。

3) ラネカーの文法については、Langacker (1987, 1991a, 1991b, 2000)などを参照。

(7) タイプ I A

Also this week, the British government proposed new restrictions on spanking children. The measure would outlaw the use of canes, belts, and slippers to spank a child and forbids striking a child's head, eyes, or ears.⁴⁾ (CNN Transcripts: Your Health, 1/22/00) (また今週英国政府は、罰として子供をたたくことに関する新しい規制を設けるための法案を提出いたしました。この法案は子供を罰としてたたく場合に、杖、ベルト、スリッパを使うことを非合法とし、子供の頭、目、耳をたたくことを禁じるものです。)

(7)においては下線部にみられるようにタイプ I Aが用いられているが、その動機は何であろうか。この引用部分では、第1文においてすでに子供を罰としてたたくということ (spanking children) が取り上げられ、第2文の前半部でも再度 “spank a child” という表現がみられる。それゆえ、第2文においてさらに “strike” という動詞を用いるときには、誰をたたくのかということはずでに文脈のなかで確立していると考えられるため、それをわざわざあらためて焦点とすることには意味がない。また、第1文からも、第2文の前半からも、この法案が、子供をしかるためにたたくこと自体を禁止しようというものではなく、子供をしかるためにたたくとき、何を用いてたたくか、どの部位をたたくかということについて新たに規制を設けようということである。したがって、“strike” という動詞を用いる時点で伝えたい内容は、体のどこをたたくかということが焦点になっていると考えられる。そこで補語の中心語として “a child” でなく、“head, eyes, or ears” が選ばれていると考えることができよう。

別の例(8)について考えてみよう。

4) 引用例文における下線は筆者が加えたもの。以下同様。

(8) タイプ I A

The boy stood off a few feet and he had the stake again and he was racing innocently in circles, making the buzzing tractor sound with his lips. I'm sorry, I thought to the snake, for you were beautiful. I took the broken length of it around the tractor and I took one of the wrenches from the tool-kit and I struck its head, not looking at it, to kill it at last, for it could never live. (The Brown Corpus)

これは、トラクターに捲くれついて切れ切れになってしまった蛇を手に取り、どうせ生きながらえそうにないからというわけで、工具箱からレンチを取り出し、目をそらしたまま頭をたたいて殺したという場面である。実は、この引用部分に至るはるか前からすでに蛇がこの場における解決しなければならない問題の対象としてしっかり登場しており、レンチを取り出した時点では、それをを用いて何かをたたくという場合、その対象がこの蛇であることはすでに自明であり、どこをたたくかのみに新しい伝達情報が含まれているはずである。したがって、“strike”の補語として“the snake”またはそれを指す“it”を用いることは緩慢な表現となるためふさわしくなく、焦点であるどの部位かということを示す“head”が中心語として選ばれていると考えられる。さらに別の例に当たってみよう。

(9) タイプ I A

He says that Patsy Ramsey in some way woke up that night, went into her daughter's bedroom, found that she had wet the bed, engaged in a physical struggle with her in the bathroom, knocked her up against the bathtub edge, striking her head, killing her, and then took her downstairs into the basement, fashioned a garrote, a killing device, to put around her neck, strangle her and then sexually assault her — because the evidence is clear that the child was sexually assaulted that night.

(CNN Transcripts: Larry King Live, 4/14/00)

これはアメリカの美少女 JonBenet の殺害事件に関して誰が犯人かということを取りざたするテレビ討論の一部である。文中の「彼」(JonBenet の母親 Patsy Ramsey のことを怪しいと考えている人物) の説によれば、Patsy Ramsey はなぜかその夜目が覚め、娘の寝室に行き、娘がお漏らしをしていることに気づき、バスルームで娘ともみ合いになり、娘をバスタブの角にぶっつけ、頭をたたいて殺害したという。下線部の先行部分に “knocked her up against the bathtub edge” と記されていることからすでに誰に対してどの程度の行為に及んでいるかということは明らかであるから、次に下線部で頭を殴ったと言うときには、誰に対する行為かということよりも、体のどの部位に対する行為かということを中心にするこのほうが情報伝達価値が高く適切であると考えられる。それゆえ、“striking her on the head” でなく、“striking her head” と言い表されていると考えられよう。

次の例は、Gerald R. Ford 元大統領が、発砲されはしたが運良く弾丸が自分から離れたときの様子を語っている部分である。

(10) タイプ I A

As I walked out of the hotel to get into the car, a shot took place. And fortunately, it missed me. Now, I'm told that across the street, where the shot came from, a lady, Sarah J. Moore, pulled the trigger. But a Marine standing next to her saw it and hit her hand, and that result was the shot missed me. (CNN Transcripts: Larry King Weekend, 2/3/01) (…通りの向こう側の発砲場所では Sarah J. Moore という女性が引き金を引いたそうですが、そばに立っていた海兵隊員がそれを目にして、女性の手をたたいてくれたおかげで、弾が私を逸れたのだそうです…)

この場面で、海兵隊員がとった行為について考えてみると、Sarah という人物のどこでもいから、この人物をたたいて打撃をあたえること自体に目的があったのではなく、この女性もっていた銃をたたき落とすなどして人に危害が加わることを避けることにこそ目的があったはずである。したがってそのことを描写する話し手の目には、銃を握っている手をたたくことが発砲による危害を避けることに直結することであり、そのように考えると銃と女性の手が一体となって捉えられ、“hit her” のような誰をたたいたかというぼんやりした表現ではなく、“hit her hand” という問題の焦点が補語として表現されていると考えられる。以上観察したいずれの例においても、構文にはそれぞれ固有の意味があり、構文の選び方には、その場の事情を表すのにふさわしい意味を備えたほうの構文が選ばれるという動機があることが分かる。

次に、タイプ I B について具体的に観察してみよう。

(1) タイプ I B

We had no intention of surfing, however, the weather was great so we decided to go surfing. And 20 minutes into it, all of a sudden a great force hit me on my leg, hit me on hand. I thought it was sea lion. I hit it with my right hand and got back on my board, looked around, saw a pool of blood around me. (CNN Transcripts: Larry King Live, 8/13/01) (サーフィンをするつもりはなかったのですが、天気がとてもよかったですからサーフィンに行くことにしたのです。サーフィンを始めて20分ほど経ったとき、だしぬけに私はなにか大きな力によって打たれました、足と手を。…)

この状況では、なにか大きな力に襲われたということに初めて触れられている箇所であるから、実際には足や手に打撃が加えられたにも関わらず、文脈の展開上、まず最初に、自分に対して打撃が与えられたということ、つまり、

そこに対峙しているのはその大きな力と自分全体との間の関係であって、大きな力と足や手との間の関係ではないのであるから、そのことを伝える必要があるために、下線部の表現としては“hit my leg, hit my hand”よりも“hit me on my leg, hit me on hand”のほうが文脈にふさわしく、そのためにタイプ I Bが選ばれていると考えて差し支えないであろう。

次に(12)について考えてみよう。

(12) タイプ I B

Bullets flew towards the Israeli troops. Watch this soldier/He appears to be hit in the hand. And armored vehicle moves in to protect him. (CNN Transcripts: Wolf Blitzer Reports, 4/1/02) (弾丸がイスラエル軍めがけて飛んできました。この兵士をご覧ください。どうやら足をやられたようです。…)

この引用部分は戦場を撮影した録画を見ながら説明しているところと思われるが、“Watch this soldier”という文によって、これから誰に焦点を当てて説明しようとしているかが明らかにされているので、その次の文にはこの兵士に何が起こったかを述べることを期待されている。したがって次の文“He appears to be hit in the hand”では、その兵士を指す要素“He”が旧情報を担いやすい位置である主語とされ、一方、新情報を担う動詞“be hit”とそれに後続する付加語の位置にも新情報として“in the hand”という体の部位を表す要素が続いて出てくるような構文が選ばれているものと考えられる。これを、例えば、“The bullets appear to have hit him in the hand”と表現したのでは、いくつかの不都合が生じてしまうと考えられる。1つには、すでに“Watch this soldier”によって兵士に視点を置いてものを見ることがいったん確立しかけたにもかかわらず、再び弾丸からの視点に逆戻りしてしまうという視点の不必要な移動という不都合が生じる。それだけでなく、第1文で弾丸がイスラエル軍めがけて飛んで来たことを伝え、第2文で特定の

兵士に注目することを呼びかけているのであるから、この兵士に弾丸が当たったことは十分予想されるとはいえ、第2文までのところではそのことがまだ確認されているわけではない。したがって新情報を担うことになる動詞“hit”の後の補語の位置に旧情報の“him”を置いてしまうと、文中の語順は、一般に文頭から文末へと、旧情報を担う要素から新情報を担うものの順に並んでいるという一般原則に反する表現を敢えて選ぶことになる、という不都合も生じる⁵⁾。このような理由から(12)ではタイプ I Bが選ばれているものと考えられる。

また、もうひとつ別の例を観察してみよう。

(13) タイプ I B

You laughed and then your chest swelled and you felt you could cry for a little bit, and then a feeling hit you like a chill in your stomach and the goose bumps rippled along your arm. (The Brown Corpus) (君は笑った後で胸が一杯になり、しばらくは泣きたいような気分になり、その後、寒気に襲われたときのように感情が胃袋に応え、腕に鳥肌がたった。)

一般的に言って、感情によって人が打撃を受ける場合、その人のどこが打撃を受けるのであろうか。医学的にみてどうかということはさておき、おそらく常識的にはその人の精神なり全存在なりが影響を受けると解釈されるのが最も普通であって、人の体のどこか特定の部位だけが打撃を受けるとは(心臓に應えるというようなことは考えられるかもしれないが)通常考えにくいのではなからうか。そうだとすると、(13)の場合にも、動詞“hit”に後続する補語として、影響を受ける人自身を指す“you”が用いられていることに説明がつく。さらに言うならば、ある感情が胃に応えたと言うとき、ただ“hit you in your stomach”と言っただけでは先ほど述べたような理由から分かりにくいので、その状態を把握しやすくするために“like a chill”(寒気に

5) 「旧から新へのインフォメーションの流れ」については、久野(1978:54)を参照。

襲われたときのように) ということばを添えて、連想による手助けを加えてこの表現を成り立ちやすくしているものと思われる。

以上のようにみてくると、タイプⅠAとタイプⅠBにおける違いは、話し手(書き手)の把握のしかたに並行するものであり、意味もそれに応じて異なっていることが明らかであろう。したがって、これら2つのタイプの表現も、文法を記号体系の一環としてとらえる言語観の一部を構成しているものと考えることができる。

Ⅲ 2通りの補語(その2)

次に、前節でみたのとは異なるタイプの補語について考察することにしよう。日本語の例文(14)に対応する英文として、(15)の2つの文が考えられる。

- (14) 彼女は手でテーブルをたたいた。
 (15) a. She hit the table with her hand. (タイプⅡA)
 b. She hit her hand on the table. (タイプⅡB)

例文(15a, b)は同じ動詞“hit”が2通りの補語の取り方をしうることを示す例である。説明の便宜上、(15a)のほうを「タイプⅡA」、(15b)のほうを「タイプⅡB」と呼ぶことにする。このような動詞の例は、以下でも観察するように、ほかにいくつもある。

巻下(1984:20-22)には「2通りの目的語」と題して、英語にみられる同一の動詞が2通りの目的語の取り方をする事実が指摘してあり、それらの例の中に“hit”や“strike”など本稿で考察しようとしている動詞と重なる部分がある。そして同書には、「動詞が2通りの目的語を取りうるという英語動詞の融通性に対する意外感とともに、2通りのうちの一方の表現(ここではbの例)に対する意外感に注意をひかれる」と記されている。(この「bの例」とは本稿でいうタイプⅡBに相当する例のことである。)

では、(15a)や(15b)のようなタイプの文はどのような場合に用いられる

のであろうか。まずタイプⅡAの(15a)の場合に、動詞“hit”と補語“the table”との関係は、あくまでもテーブルをたたくことが目的でその動作が行われ、その動作の遂行のために自分の手を用いたと考えられる。一方、タイプⅡBの場合はどうであろうか。次の実例を通して観察することにする。

(16) ALVY : (*Hitting his hand on the counter*) (Allen 1997:18)

これは、Alvyが映画館の入り口のカウンターで行ったしぐさを説明するト書きである。Alvyは、映画は一番最初から最後まで観る主義なのであるが、映画館の入り口でチケット係りの人物に尋ねたところ2分前にすでに上映が開始されたことを告げられて、「これじゃダメだ、入るのはよす」と言いながら手でカウンターをたたいた場面である。このことから伺えるように、Alvyの動作の目的はテーブルをたたくこと自体にあるのではなく（その場合には、“Hitting the counter with his hand”と表現することが適切であろう）、自分の手を使って何かをたたくことによって自分の苛立ちの気持ちを表すことにあると考えられ、そのためにタイプⅡBの構文が選ばれていると考えて差し支えないであろう。

さらに別の例を観察してみよう。

(17) ALVY : ... (*He continues to swat the racquet all over the bathroom....*)
(Allen 1997:116)

これはAlvyが別居中の妻Annieから深夜に電話で非常事態なので来てくれと言われ、彼女のアパートに急いで行ってみると、非常事態とは大きなクモが出たことだと告げられたときのことである。深夜に呼び出され、しかもタクシーがないので走って来たのに、その理由がこんなことかと腹立たしく思いながら、バスルームのなかでクモを退治すべくテニスラケットであちこちたたき回し、置いてある調度品が音をたてて床に落ちるのもかまわずたたき

回している場面のト書きである。クモを退治するための動作のほうではあるが、(17)のように“the racquet”を“swat”の補語として表現してあると、クモを退治することよりも、“racquet”を振り回すことが Alvy の苛立ちによる動作であることを前面に押し出すかたちで表現されることになると思われる。

こうしてクモを退治した Alvy がバスルームから出て、別の部屋に入っていくと、ベッドの上で Annie は、Alvy に帰らないで欲しい、別れていることが淋しいので、と泣きながら訴え、そのときの Annie のしぐさが(18)のト書きに示されている。

(18) *She beats her fist on the bed.* (Allen 1997:117)

これもタイプⅡBの表現であるが、ベッドを連打することに目的があるのでなくて（その場合には“*She beats the bed with her fist*”と表現するのが適切であろう）、こぶし“*her fist*”を動詞“*beat*”の補語とすることにより、こぶしでなにかを連打する動作に彼女の感情が表れていることを言い表す表現となり、ベッドはその感情をあらわにするためにたたかれた対象であったにすぎないと考えることができよう。

ところで、辞書の“*strike*”の項には、他動詞の用法のひとつとして、*to cause to hit; dash; knock* という定義とともに、例えば次のような例文がみられる⁶⁾。

- (19) a. The child struck her head against the crib.
 b. He struck his fist against the table and called for order.

これらの例文は何が動詞の補語となっているかという観点から見てどちらも

6) この定義と例文(19a, b)は *World Book Dictionary*, s.v. *strike* より引用。下線は筆者が便宜上付したものである。

タイプⅡBに属すると考えられるが、(19b)の場合には、彼の動作の目的がテーブルをたたくこと自体にあるのではなくて、握りこぶしで何かをたたくことによって、この場合には注文を取りに来るよ^うにという意図をあらわにしたということを表現するための文であり、そのような意味がこの構造自体に備わっているということができよう。

小西編(1980:1523)には、(19b)の例文を引用して「注文を取りに来るよ^う彼はこぶしでテーブルをたたいた」との邦訳を付したうえで「彼の意図を表す」と注釈が加えてあるが、これは今われわれが観察したことと同趣旨の内容であると思われる。

なお、これらの例文に対応する日本語としては(20)などが考えられるであろうが、

- (20) a. その子はベビーベッドで頭を打ってしまった。
b. 注文を取りに来るよ^う彼はこぶしでテーブルをたたいた。

英語の(19a)においても、日本語の(20a)においても、タイプⅡBが用いられているにもかかわらず、意図は感じられない。英語においては、すでにみてきたように、何らかの意図や感情をあらわにする場合にタイプⅡBが選ばれると考えられるが、逆に、タイプⅡBが常に意図を表すために用意された構文であるとは言いきれないということも言い添えておかなければなるまい。

一方、日本語においては、(14)と同じ動詞「たたいた」を用いて(21)のように言うと、

- (21) 彼女はテーブルで手をたたいた。

彼女にそのような意図はなかったけれども、なにかの弾みで手がテーブルに当たってしまい、「あ痛っ！手をたたいてしまった！」と言うような場合のことを意味し、意図のないことが表される。

意図と構文の関係について日英語にどのような相違や類似点があるかについては、さらに今後の検討課題としたい。

IV まとめ

本稿では、2通りの補語を取りうる英語の動詞構文の中から2種類の構文を取り上げ、それぞれについて、2通りの構文がもつ意味の違いを中心に考察した。これらの構文についても、認知言語学で考えられているとおり、全体の意味が構成素の意味の総和に還元できないゲシュタルト的性格のものであること、また、語彙項目がそれぞれ特有の意味をもっているのと同様に、構文そのものも、それぞれ特有の意味をもっているということができ、そのことが特定の構文を選択する動機となっていると考えられることを検証した。

(筆者は関西学院大学商学部助教授)

参考文献

- Allen, Woody. 1997. *Annie Hall*. Revised ed. Tokyo: Shohakusha.
 小西友七(編). 1980.『英語基本動詞辞典』研究社出版.
 久野 暉. 1978.『談話の文法』大修館書店.
 Langacker, Ronald W. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar, Vol. 1: Theoretical Prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.
 Langacker, Ronald W. 1991a. *Concept, Image and Symbol: The Cognitive Basis of Grammar*. Berlin: Mouton de Gruyter.
 Langacker, Ronald W. 1991b. *Foundations of Cognitive Grammar, Vol. 2: Descriptive Application*. Stanford: Stanford University Press.
 Langacker, Ronald W. 2000. *Grammar and Conceptualization*. Berlin: Mouton de Gruyter.
 卷下吉夫. 1984.『日本語から見た英語表現—英語述語の意味的考察を中心として—』研究社出版.
 益岡隆志・仁田義雄・郡司隆男・金水 敏. 1997.『文法』(岩波講座 言語の科学 5) 岩波書店.

コーパスおよびインターネット上のリソース

- Brown Corpus* on the ICAME CD-ROM (*ICAME Collection of English Language Corpora*, 2nd ed. 1999) made available by The HIT Centre, University of Bergen, Norway.
 CNN Transcripts, from <http://www.cnn.com/TRANSCRIPTS/>.